第三章　鎌倉・室町時代の郷土と土肥氏

第一節　土肥実平とその子孫たち

西国へ進出

安房に渡った源頼朝は、北上して上総、下総、武蔵へと兵を進め、一〇月六日に鎌倉に入った。この間、下総の千葉常胤をはじめ、関東各地の武士たちがぞくぞくと頼朝の陣営に加わった。頼朝は父祖以来の由緒の地鎌倉を本拠地として武家政権の樹立をめざすことになった。

実平はその後も富士川の合戦や常陸出兵などで頼朝に従い、源義経の接待や鶴岡八幡宮の造営奉行など重要な任務にあたった。頼朝の実平に対する信頼は変わらなかった。平氏打倒のため義経らが西国に派遣されると、これに従軍した。一一八四年（元暦元）には備前・備中（岡山県）・備後（広島県）三か国の守護に任じられ、播磨・美作（兵庫県）の守護に任じられた梶原景時とともに、平家敗走後の西国支配の責任者となった。

その間、実平の嫡男遠平も父と行動をともにし、父を補佐した。挙兵以来、父とともに頼朝に忠節をつくした遠平であったから、頼朝の信頼を得、側近として重要な場面に活躍した。この父子は頼朝と信頼感や忠節心といった個人的・人格的な関係で親密な結びつきをもっていたが、中央の貴族や政界との政治的関係をどう築いていくかに腐心していた頼朝の政治的立場は理解できなかった。実平・遠平は畿内近国や西国でさかんに荘園侵略を

行なって、貴族らに訴えられ、西国で与えられた所領や権限をしだいに失っていった。そうして最後まで残った所領が安芸国沼田荘（広島県）地頭職であった。

晩年の実平は、一一九〇年（建久元）頼朝が右近衛大将に任じられて、拝賀の儀式に上洛したときに、行列の先陣をつとめている。このとき、同じ先陣の後方に土肥荒次郎と二宮小太郎光忠が加わっている。ついで、翌建久二年七月一八日、内の厩（うまや）の立柱上棟が行なわれたとき、実平は義兄弟の岡崎義実とともに責任者となってこれを執行した。これが『吾妻鏡』で実平の名が見える最後である。これからまもなく実平は亡くなったのであろう。

小早河弥太郎

遠平は土肥弥太郎と称した。『吾妻鏡』にもそう記されている。ところが、実平の最晩年のころから、『吾妻鏡』の中にときどき「小早河弥太郎遠平」として登場してくるようになる。小早川は早川荘（小田原市）の内の地名とみられているが、場所は特定されていない。遠平が小早川と名乗ったのは、早川荘を頼朝から与えられたかれが、そこの支配に力を注いで、土肥氏の新しい拠点としようとしたことを意味する。

早川荘は、はじめ早川牧といい、山野で馬を育てる牧場であった。一一世紀の後半に相模守であった大江氏が所有しており、藤原氏に寄進して、みずからは領家となった。やがて田畠の開発が進められて、一一一五年（永久三）には早川荘と称するようになっている。現在の小田原市多古・池上・早川・風祭などの地域である。

遠平がいつ早川荘の支配を認められたかはわからない。一一九一年（建久二）正月には『吾妻鏡』に小早河弥太郎と見え、翌年二月には頼朝の父義朝の乳母だった摩々局に頼朝が早川荘の内で新しく三町の土地を与えたとき、遠平にその執行が命じられているから、一一九一年正月以前のことになる。一二〇二年（建仁二）には早川

荘が二つに分けられ（中分）て、田地一四〇町六段分が遠平の支配から除かれ、箱根権現に渡されているが、このときの遠平は「預所土肥弥太郎遠平」と記されており、もとは早川荘全体の預所という職にあったことがわかる。しかし、こののち土肥氏が早川荘を支配していたことを示す史料はない。

遠平は、いわば土肥氏と小早川氏という二つの顔をもっていたともいえる。その二つの顔は、遠平の二人の子に一つずつうけつがれることになった。遠平には惟平という実子がいたが、のちに頼朝と同じ清和源氏の流れをひく平賀義信の子を養子とし景平と名乗らせた。惟平は土肥先二郎（次）と称し、一一九五年（建久六）四月に頼朝が上洛したときに随行したのが『吾妻鏡』での初見である。惟平は嫡男として土肥を名乗り、本領土肥郷をうけついだ。他方、景平は小早川の名字と安芸国沼田荘を譲りうけた。こうして、土肥氏の一流が小早川氏として独立し、やがて安芸国に本拠を移し、室町時代には安芸国でも屈指の武家として成長していくことになる。ところが、本家の土肥氏は一二一三年（建保元）滅亡の危機に瀕し、急速に力を失う。

惟平、首を刎ねらる

実平・遠平のように、頼朝との人格的な結びつきによって、鎌倉幕府内で重い位置を占め、重要な役割を演じた武士は、幕府草創期には数多くいた。しかし、一一九九年（正治元）正月に頼朝が亡くなって後は、そのような御家人たちと、幕府内での実権を集中しようとする北条氏との間に摩擦が生まれ、対立、戦争へと発展することが多くなった。それらは北条氏がしくみ、挑発して引きおこさせたもので、有力な御家人はそれに陥れられてつぎつぎと滅亡への道をたどることになった。

一二一三年五月におきた和田合戦も、北条義時がしくみ挑発して、和田義盛を蜂起させ、滅亡に追いやった、幕府成立以来最大の内戦であった。三浦義明の孫にあたる義盛は、頼朝から全幅の信頼を得て、幕府創立以来侍所別当の地位にあり、三浦一族の重鎮でもあった。相模・武蔵の御家人との間に幅広い結びつきもあったから、

この合戦には和田一族のほか、山内、渋谷、梶原、大庭等々、相武の武士たちが数多く参加した。

幕府方の文書には、この蜂起の張本人を義盛・土屋大学助義清・横山右馬允時兼の三人としているが、この中の土屋義清は土肥実平の甥にあたる人物である。そして、土肥先次郎左衛門尉惟平も、義清の甥にあたる岡崎左衛門尉実忠もこの合戦に和田方として参加、奮戦した。義清の父で実忠の祖父は三浦義明の弟、その妻は実平の姉妹であったから、かれらは義盛と縁戚関係によって結ばれていたのである。

合戦は鎌倉を舞台に五月二日・三日と戦われたが、義盛・義清ら張本三人はもちろん、それらの一族、その他多数が討ち死にして、和田方の敗北に終わった。土屋氏は義清をはじめ一〇人が討ち死に、土肥氏でも、惟平の子供とみられる土肥左衛門太郎、同次郎、および土肥小太郎が討ち死にし、惟平はとらえられた。そして合戦から五か月余りたった同年閏九月一九日、首を刎ねられたのであった。

幸いなことに、惟平の父遠平はこの合戦に関与しなかったため、本領の土肥郷と安芸国沼田荘は没収されなかった。そして土肥郷は惟平の遺児維時に譲られた。惟平父子の死が遠平にとってどれだけ衝撃的なことであったか、想像して余りある。しかし、頼朝死後、はげしくなった逆風の中で、この運命はさけがたいものであったといわざるをえない。ここに土肥氏は三代目で、幕府内における地位と力とを決定的に失ってしまったのである。本領を保持したことがせめてもの救いであった。

鎌倉後期の土肥氏

惟平が殺されて後しばらくの間、土肥氏が将軍の外出などの晴(はれ)の場にお供として供奉(ぐぶ)することはなかったようであるが、やがて、供奉の人々の中に、土肥太郎、土肥次郎兵衛尉、土肥次郎左衛門尉、土肥四郎左衛門尉実綱などの名が見られるようになる（『吾妻鏡』）。

一二五二年（建長四）に第六代の将軍として鎌倉に迎えられた宗尊親王（後嵯峨天皇の子）が、一二六〇年（文

応元）一二月一日、伊豆山に詣でた後、土肥郷に宿泊した。土肥郷では「当所御所において御駄餉等、美を極め善を尽」して、これを歓迎し丁重にもてなした（『資料編』古代・中世No.23）。このとき、土肥郷にあって、もてなしの指揮をとったのは土肥実綱であろう。次章で見る戦国時代の例などから考えて、真鶴町域の漁民たちがとった魚介類がもてなしの膳をかざったにちがいない。

実綱は維時の子とも孫ともいわれるが、土肥次郎左衛門尉のあとをついで、土肥郷の領主となったのであろう。はじめ四郎、ついで左衛門四郎、そして四郎左衛門尉と称した。この将軍宿泊の年の正月に、将軍の御所の昼番衆が定められた。それに選ばれたのは「歌道・蹴鞠（けまり）・管絃・右筆（ゆうひつ）・弓馬・郢曲（えいきょく）以下」の一芸にすぐれ、将軍御用をつとめられる者たちであったが、実綱もその一人に選ばれている。『吾妻鏡』はこの実綱の代までの記録で終わっている。

その後、土肥氏が史料にあらわれるのは一三〇七年（徳治二）である。中国の元が日本に襲来した文永・弘安の役のころ鎌倉幕府の執権であった北条時宗は一二八四年（弘安七）四月四日に亡くなった。その忌日の毎月四日に円覚寺で法要が行なわれていたが、徳治二年、子の貞時がその法要を営み、費用などを分担させるために、一番から一二番までの当番を決めた（結番という）。その中の四番八人のうちに土肥三郎左衛門尉の名が見える（円覚寺文書）。ついで、貞時の一三回忌が一三二三年（元亨三）に円覚寺で盛大に営まれたさい、「土肥山」などで材木が伐り出された。そのときの地頭は土肥二郎左衛門尉であった（『資料編』古代・中世No.24）。二郎左衛門尉の指揮のもと、土肥郷の人々が伐採や運送に動員されたはずである。

この二つの法事は執権北条家の私的な行事であり、幕府の公的な行事ではない。したがって、当番や材木提供をした者は北条氏の一族や、御内人といわれる北条氏の家臣であったと考えられる。とすれば、土肥三郎左衛門

尉も同二郎左衛門尉も、鎌倉時代末期には、将軍の御家人として独立的な立場を保つことができず、北条氏に従属するような関係に陥っていたということになる。

第二節　龍門寺創建のころ

『太平記』の中の土肥氏

文永・弘安の役後、幕府の要職や各国の守護職を北条氏が独占するようになり、得宗（北条氏嫡流の当主）専制といわれる体制が強まっていった。しかし、それは逆に北条氏や御内人に対する激しい反発をひきおこし、倒幕運動へと発展することになった。

一三三三年（元弘三）五月八日、新田義貞が上野国新田荘で挙兵し、鎌倉に向かって進撃を開始した。武蔵でこれを迎え討つ幕府軍をつぎつぎと打ち破って鎌倉に迫ると、関東・陸奥・出羽の武士たちがぞくぞくと倒幕軍に馳せ参じた。相模勢も、「三浦大多和平六左衛門義勝ハ、兼テヨリ義貞ニ志有シカバ、相模国ノ勢松田・河村・土肥・土屋・本間・渋谷ヲ具足シテ、以上其勢六千余騎、十五日ノ晩景ニ、義貞ノ陣へ馳参」った（『太平記』）。土肥・土屋氏が三浦氏の一族大多和義勝に率いられて、新田義貞軍に合流したのである。そして翌五月一六日、三浦勢は分倍河原の敵陣に襲いかかり、これを打ち破って敗走させた。

鎌倉攻撃は五月一八日に開始された。しかし、出入り口を固めて必死に防戦する北条軍のために激戦・苦戦が続き、ようやく二二日に北条高時以下を自刃に追いこんだのであった。鎌倉は火を放たれて灰燼に帰し、鎌倉幕府は滅亡した。

京都には鎌倉幕府が京都や西国を支配するため設置した六波羅探題があったが、五月八日、足利高氏（のち尊

氏）はこれを攻め滅ぼした。

こうして六月、後醍醐天皇が隠岐から帰京して建武の新政をはじめると、義貞と尊氏は倒幕の功労者として新政権内部にならび立つことになった。しかし、天皇親政をかかげる建武政権に武士の不満が強まると、一三三五年（建武二）尊氏は、北条高時の遺子時行のおこした中先代の乱の鎮圧を名目に鎌倉に移り、征夷大将軍と自称して、新しい政権樹立に向かって歩み出した。

天皇の命をうけて新田義貞が尊氏・直義兄弟を討つため、関東に向かうと、直義は各地の武士に義貞打倒を訴えて軍勢を催し、一一月二〇日鎌倉を出立した。「松田・河村・土肥・土屋・坂東ノ八平氏、武蔵七党ヲ始トシテ、其勢二十万七千余騎」の大軍であった。土肥氏はここに、建武政権からも義貞からも離れて、足利方に属す道をとったのである。こうした武士の期待に応えるべく、尊氏は一三三八年（暦応元）室町幕府を開いた。

一三五二年（文和元）新田義貞の子義興らが西上野に挙兵すると、「土肥次郎兵衛入道・子息掃部助・舎弟甲斐守・同三郎左衛門」が、土屋・二宮氏らとともに尊氏軍に参陣している。

これより先、尊氏は東国を支配するために、子の基氏を鎌倉に入れ、関東公方とした。文和二年、関東から上洛するにあたり、尊氏は基氏の補佐役として畠山国清らを執事（のちにこれを関東管領という）に任命した。ところが、国清は基氏と対立して、一三六一年（康安元）に解任され、伊豆国に逃れる途中、小田原宿に泊まった。その夜「土肥掃部助主従只八騎ニテ、小田原宿ヘ推寄セ、風上ヨリ火ヲ懸テ、畑ノ下ヨリ切テ入」り、ついに国清方を追い落とした。

以上が『太平記』からみた土肥氏の動向であるが、南北朝の内乱の中で、足利尊氏や基氏方に属したことが幸いして息をふきかえした感さえする。

兵衛入道と三河守

戦乱に乗じ、時勢に乗って、昔日の勢いをとり返そうとするあまり、ときに羽目をはずしてしまうこともあった。一三五三年（文和二）、土肥兵衛入道と舎弟甲斐守は、鶴岡八幡宮御影堂料の相模丸島郷（平塚市）の内の土地を押領したとして尊氏から停止命令をうけている（鶴岡等覚相承両院文書）。先記、文和元年の『太平記』に記された土肥氏のうち二人の実在が確認される。

いつからかはわからないが、一三八五年（至徳二）には土肥郷の半分が伊豆山東明寺の領地となっていた。同年一〇月、兵衛入道はこの年貢を納入しないため訴えられ、関東公方足利氏満（基氏の子）から完納するよう命じられている（『資料編』古代・中世№27）。土肥郷の半分を失ったのは、あるいは鎌倉時代のことであろうか。相当の痛手だったにちがいない。

他方で兵衛入道は、一三七五年（応安八）、円覚寺領となった駿河佐野郷（静岡県裾野市）を押領している法智なる人物を郷内から追い出し、土地を円覚寺側に引き渡すよう、関東公方から命じられている（円覚寺文書）。そして、一三八四年（至徳元）には同様の命令が土肥三河守顕平に出され、顕平は翌年二月、この命令を執行した（同前）。この顕平は、兵衛入道とは別人で、兵衛入道のあとをついだ人であろう。この二人が西相模の有力武士として重んじられていたことがうかがえる。

ところで、足利基氏の招きで鎌倉の円覚寺住持となった、臨済宗の高僧義堂周信（ぎどうしゅうしん）が、一三七五年（応安八）三月四日、熱海の湯治から帰る途中、土肥の成願寺を訪れた。そのとき、住職の雲林清深は不在であったが、旦那の真順居士に会い、その私邸に招かれてお茶を飲み、語り合っている（『資料編』古代・中世№26）。この真順居士こそ兵衛入道であろう。同人は臨済宗に帰依して成願寺を建立し、一族の菩提をとむらったのである。今、その成願寺の後身は万年山城願寺となって、土肥氏の館跡にある。その墓地には「正岩順公　大禅定門　十月　日

時至徳三年　逝去」と刻まれた石塔がある。この人が兵衛入道、真順居士であり、その没年は一三八六年であった。

龍門寺の瀑布

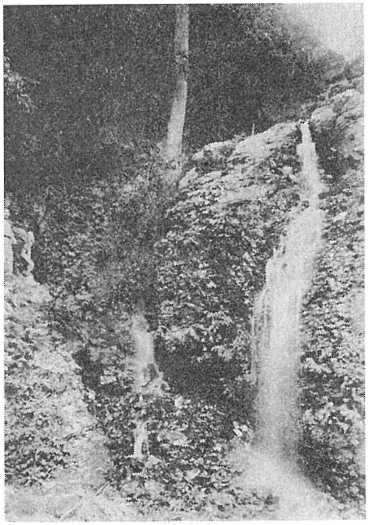
義堂周信は、足利尊氏らの帰依をうけ京都天竜寺や甲斐恵林寺などの開山となった夢窓疎石の弟子で、南北朝時代の五山文学を代表する禅僧である。空華道人と号して、詩文集『空華集』や日記『空華日用工夫略集』を残している。

鎌倉滞在中しばしば熱海の温泉に湯治に出かけており、その往来に当町域を通過しているはずである。先記のように一三七五年に成願寺を訪れたとき、方丈に入って東方を望み、真鶴が崎、笠島のながめを愛(め)でて日記に記している（『資料編』古代・中世No.26）。

東面は海波天に際(きわ)まり、一目万里豁(かつよ)如たるなり。いわゆる真名鶴が崎、笠島と名づくるは、三峰凹の字形の如くにて愛すべし。

成願寺の方丈から東の方をみると、海がひろびろと広がり、真鶴が崎の先端の、笠島と名づけられた三つの峰が「山」の字のごとくに並んですばらしい、といった意味である。この笠島は今、三ツ石とも呼ばれている。

また、周信はその一年前の一三七四年（応安七）、やはり熱海に赴いたさいの二月一八日に岩の龍門寺を訪れて瀑布（滝）を見、その感動を漢詩文に作り、同寺の観音堂の壁に書きつけた（『資料編』古代・中世No.25）。漢



龍門寺の滝（龍門寺蔵）

詩の読下しで味わってみよう。

危磴盤盤、上方に到る。道人かつてここに天蔵を発す。翠壁千尋の嶮を擘開して、銀河一派の長きを迸出す。雲は湿いて三更僧裓冷く、雪は飛びて六月仏身涼し。鑿余の山骨堆くして墨のごとし。まさにこれ神工夜牆を築くなるべし。昔人ここに住して諸方を謝す。風烟を収拾して屋底に蔵す。聞くならく、説客来りて敲くとも出ずと。想うに、まさに眠穏かにして夢かえって長かるべし。一瓶の柳色三春嫩し。千尺の巌流、九夏涼し。芋火香を吹きて俗駕を牽く。隄防恨むらくは、蕭牆を慎まざることを。

また、周信の友人の禅僧九峰信虔も右の詩文に和して、次のような漢詩文を作っている。

まさに余波の下方に及ぶ有るべし。雲を穿ちて遠勢遮蔵しがたし。直に疑う碧落九重の上。白龍千尺の長きを飛び下るかと。澆ぐ処すでに知る枯槁の活することを。熱き時いまだ飲まざるに肺肝涼し。山僧力を省きて崖屋を構え、石筧流れを伝えて巌牆と作す。

江戸時代末期に幕府によって編集された『新編相模国風土記稿』にもこの滝の様子を次のように描いている。

本堂の後背山腹に在、岩腹怪奇石畳が如し、高五丈許、飛泉奔下する驟雨の如く、石岸にさゝへて左右に散乱す、山上松杉蓊鬱として蓋をなせり、実に幽邃の地なり、左方岩腹に窟あり、中に倶利加羅不動の石像を置、下に道了権現社を祀る、

義堂周信が一〇人ほどの仲間と龍門寺を訪れたとき、寺には住職はなく、ただ一人の修行僧がいるのみであった。その僧が語るところによると、開山の僧は道禅禅師といい、「不測の人なり。けだし異行有り。鬼神を感じて一宵の役を助くる」と、通常の人とは異なる、はかりがたい人、かわった行動をとる人であったとされる。そして、この滝に鬼神を感じて、一夜にして寺を建てたという。開山は一三六八年（応安元）に亡くなったという

から、寺の創建は一四世紀のなかばのことであろうか。土肥兵衛入道が成願寺を建てた時期と同じころか、あるいはそれを少しさかのぼるころかもしれない。開山の名から、禅宗寺院と考えられるが、宗派はわからない。

龍門寺は江戸時代には多宝山瀧門寺といい、曹洞宗で、本寺は伊豆南条村（静岡県韮山町）泰岳山昌渓院であった（『資料編』近世No.126）。当時の寺院の多くがそうであったように、弘法大師開闢の地としたうえで、開基を一五〇四年（永正元）二月三日没の原行和尚とする。そして、一五七三年（天正元）に開山の林屋和尚が開闢し、一五八七年一一月二七日に同和尚は没したと伝える。

この寺伝によれば、周信の訪れたときから、開基原行和尚まで一四〇年近い年月がたっている。南北朝時代の龍門寺についてはまったくふれられていない。この間長い断絶の時代があったのであろうか。それとも、宗派のちがい等の理由から、曹洞宗寺院としての龍門寺の創建以前の歴史は、別の寺の歴史とみなされたのであろうか。開山林屋和尚の代にあたる一五八七年九月一日付の文書や、一六一〇年（慶長一五）と翌年の文書（『資料編』近世No.113・114）の宛名にはいずれも龍門寺とあるので、寺の名は南北朝時代の名が継承されていることになる。ところが、一六八〇年（延宝八）の除地高書上（『資料編』近世No.118）には瀧門寺となっており、この間に龍から瀧へ変化したのであろう。南北朝期と戦国期の断絶と連続のなぞを解くかぎは何であろうか。周信のときに観音堂があったことがわかるが、江戸時代にもやはり観音堂があり、十一面観音の石像が安置されていた。この観音堂が南北朝期と戦国期を結びつける秘密をにぎっているかもしれない。

土肥氏滅亡

初代関東公方基氏の曾孫にあたる持氏は、父満兼病死のあとをうけて一四〇九年（応永一六）四代目の関東公方となった。これを補佐する関東管領には犬懸上杉禅秀（氏憲）が任じられた。上杉氏は一族が分立し、犬懸上杉、山内上杉、扇谷上杉などと呼ばれた。一四一五年四月、持氏は禅秀の家人（家

臣）で常陸国に住む越幡六郎の所領を、ささいな罪を理由に没収した。禅秀はその処置の撤回を求めた。しかし、持氏が拒否したことから、禅秀は病気と称して引きこもり、五月に関東管領職を辞任した。持氏はさっそく禅秀の一族の山内上杉憲基を関東管領に任命した。

この対立を利用して禅秀に謀叛を働きかけたのは、京都で将軍義持へ叛旗をひるがえそうと機会をねらっていた将軍の弟義嗣であった。このさそいをうけた禅秀は、持氏の叔父足利満隆をだきこみ、満隆の回文に自分の副状をつけて、縁戚関係にある武士、持氏に不満をもっている武士らに呼びかけた。これに応じた相模の武士が、土肥・中村・土屋・曾我であった。千葉・佐竹・宇都宮・白川結城・蘆名ら関東・陸奥の錚錚たる武将がこれに応じた。

こうして、一四一六年（応永二三）一〇月二日夜、禅秀方は鎌倉で蜂起し、まず持氏の御所を襲撃した。禅秀の乱である。持氏は関東管領邸に逃れた。六日、持氏・憲基は鎌倉を脱出して小田原の宿に逃れた。「爰に土肥・土屋の者ども、元来禅秀一味なれば、小田原の宿へ押寄、風上より火を懸攻入ければ、御所と憲基をば落しけり」と、土肥・土屋の一族は禅秀方として、小田原宿に逃げてきた持氏らを、宿に放火して攻撃したのである。このため持氏らはさらに駿河へと敗走し、禅秀方が鎌倉を掌握した。

駿河守護今川範政はこれを幕府に注進した。幕府は禅秀らを討つよう命じた文書を発し、範政も関東の諸将に回状を送って寝返りを促し、あくまでも謀叛の側につくならば所領は没収されるとおどした。禅秀勢の動揺は少なくなかったと考えられるが、かれらは駿河に兵を進めた。しかし、今川勢は攻勢に出てこれを破り、足柄峠を越えて相模に入り、「曾我・中村を攻おとし、小田原に陣を取」った。他の一隊は箱根山を越えて「土肥・土屋・中村・岡崎を攻おとし、同小田原・国府津・前川に陣を取」った。これが一四一六年暮れのことであった。

翌年正月早々、寝返る者が出て動揺した禅秀方は鎌倉に引いて戦ったが、たちまち敗北して、ついに一〇日満隆・禅秀以下ことごとくが自刃した。乱は三か月で終結した（『資料編』古代・中世№28）。

土肥・土屋・中村・岡崎はこの時代に至っても行動をともにしていることが注目される。曾我も縁戚関係によって行動をともにしたのであろう。かれらの領地は今川軍に踏みにじられた。かれら自身がことごとくこの乱で戦死したかどうかはわからない。しかし乱後、持氏は禅秀方にくみした武将の討滅を執念深く行ない、その領地を没収したから、かれらが生きて領地を保つ余地はまったくなかった。「大森には土肥・土屋が跡を給はり、小田原に移り」（『資料編』古代・中世№28）とあるように、土肥・土屋両氏の領地は完全に没収されて、持氏方として功績のあった駿河駿東郡の大森頼春に与えられた。このときから当町域は大森氏の支配下に入った。ここに土肥氏は土肥の領主としての二五〇年の歴史を完全に閉じることになったのである。

その後の土肥氏

中村氏から土肥・土屋などが分かれて家をおこしたように、中世の武家では兄弟が独立して新しい家をおこすことが一般的であった。とくに中世前期ほどその傾向が強く、荘園や郷の開発領主となったり、地頭職を譲られたりして独立した屋敷を構え、その土地の地名を名字とした。しかし、そうすると数代で土地が細分化されてしまうなどの弊害も出てきて、中小の武家では鎌倉時代後期ころから、新しい名字を名乗るような分家は出せなくなる。兄弟は嫡子の家臣となるか、関東公方・関東管領・守護やその他の有力武家に仕官して領地を獲得するなどの道をとるようになった。室町時代にはそれが一般的になる。土肥氏もおそらくそうであったであろう。

武家は家や領地を守り、あるいは発展させるために、一族・兄弟の結びつきを維持したが、他面ではたがいに争いあうことも多かった。鎌倉時代の和田合戦でも一族で敵味方に分かれて戦っているが、その後のさまざまな

合戦でも同様であった。それによって、どちらかが勝者の側になって生き残ることができ、家を存続させることにつながったのである。

土肥氏でも鎌倉時代から室町時代を通じて、土肥氏を名乗る一族が分立し、本領の土肥郷から離れて新しい活動の場を得た人々があった。今日、当町域を含めたかつての土肥郷の地に、土肥氏を名乗る人はいない。しかし、静岡や茨城、富山、山形、山陰地方等々の各地に、土肥氏を名乗ったり、土肥氏の系図や由緒を伝える家や場所がたくさんある。鎌倉時代から今日まで、人・家の移動は、今日の私たちの想像をこえて非常に多かったのである。だから、土肥一族の足跡をたどる作業は容易ではない。すべて今後に残された課題といってよい。

ただ興味深いのは、禅秀の乱後の関東に土肥氏を名乗る人々がいたという点である。禅秀の乱以前に本家から独立し、乱では禅秀方に加わらなかったにちがいないのである。まず、土肥中務少輔という人物があげられる。名乗りから見て、かなりの力をもった人物と考えられるが、同人は扇谷上杉持朝に属して、持朝から中豊田郷（平塚市）を、戦争のための兵糧にあてる領地として与えられていた（『県史』資料編3、六二八五）。また同人は南金目（平塚市）の領主か代官で、その地の光明寺に寺領の年貢を怠りなく納入するよう、関東管領の上杉顕定から指示されている。この文書は江戸時代に「摂陽浪華」（大阪府）にいた土肥氏の後裔が所持していたもので、一七九七年（寛政九）鎌倉光明寺に寄進されたものである（『改訂新編相州古文書』五）。同人が上杉氏に仕え、平塚市域に領地をもっていたことがわかる。

また、戦国時代には関東公方の後裔の古河公方に仕える人の中に、土肥次郎、といの弥七郎、土肥中務の名が見える。このうちの中務は上杉氏に仕えた中務少輔の系譜を引く可能性がある。